Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

重度の障害を持つ子どもと共に育つ保育について

下里　里枝
（姫路市立手柄保育所　）

1、はじめに

Y児の受け入れについては、事前にH園より相談があった。Y児の母親が両親の介護が必要となり、H園は母子通園なのでY児を連れての通園が困難となった。Y児だけを預かってくれる保育所に入所させたいとのこと。情緒は安定しており理解力は3歳位あるとのことだったが、面接するとY児は言葉がなく１人では何もできず全面介助が必要で、集団保育が可能という基準からは大きくはずれていた。

入園当初のY児の姿

- 平成10年１月7日生まれ
- 家族構成・・・両親、2人の兄、祖父母の7人家族
- 生育暦・・・在胎24週　592gで出生。双子で他児死亡
- 生後11ヶ月に市内の障害児通園施設で療育開始、
- 平成12年4月1日　市立H園（肢体不自由児通園施設）入園
- 平成14年4月1日　当保育所入所　現在に至る
- 障害の様子・・・脳性小児麻痺（両上下肢の著しい機能障害、自分で体を支えることはできない）・　移動は車椅子・　身体障害者手帳（1級）・療育手帳（判定A）・特別児童扶養手当有り

母親の切羽詰った状況を考えると断りきれず、育児支援として考え受け入れることにした。しかし障害児加配保育士もないままの受け入れとなった。幸いにも本児が今まで通園していた施設からの本児用の介護備品の援助や、入所当初は、スタッフの派遣があったし、職員も理解があり、協力体制もとれたのでスタートできた。受け入れるからには、他の子ども達と共に快適に楽しく保育所生活をおくり、決してお客さんのような扱いでなく、クラスの一員として受け入れ共に育つ保育をしたいと思った。今回の発表は、保育者としていかに援助するかを含め本児と一緒に生活した子ども達が見せてくれた、Y児への優しい言葉や、態度、心使いから、障害児と共に育つ保育のあり方、そしてY児の成長について考察したい。

2. 受け入れる保育環境について

1学期は１階の3歳児クラスでY児担当の保育者と2人で保育した。昼寝は、他児に踏まれたら本児は一人で移動できないので安全のために作業療法士にベッドを作ってもらった。排泄（おむつ交換）は交換台を作った。給食は何でも食べるが一人では無理。テーブルつきの椅子を作ってもらい、食事用滑り止めマットを用意。麺類はヌードルカッターで切りストロー付きのコップを使用し、吸うことはできないので汁物はスプーンで食べさせた。足を固定するための装具や、戸外遊び用の移動車や砂場用いす（上半身固定）は施設に作ってもらった。体温調節困難なため、クーラーを設置。絶えずバギーのストッパーの確認をし、他児が押して危険がないようにした。

3. 保育の経過と他児とのかかわり(2002年度)

①子ども達の疑問

子「なんでおむつしとん」保育者「Y君歩いてお便所いかれへんからね」子「抱っこして行ったらええやん」保「そうかもね・・・」子「あしたになったらあるけるん？しゃべれるん？」保「今練習しているの。歩いたりお話したりできるといいね・・・。」子ども達の疑問が本児理解につながる応答をしたいが納得する言葉がみつからずあいまいに答えることもある。3歳児に障害を理解させるのは難しい。でも子どもは自分のことは後になってもY児のお手伝いをしたがる。そんな場面から関わりを作っていった。

②Y児の笑顔は柔らかい。

気分の荒れていたＤ児に「Y君がベッドから落ちないように見ていて」と依頼すると、Ｄ児はそばでみていた。するとY児がＤ児の足を触り始めた。「Y君が足こそばす」と笑いながら言い、Ｄ児もY児の足をこそばし始めた。Y児と共感を得るのはこんな場面からかもしれない。しばらく、2人は穏やかに過ごした。Y児は、うれしい時や悲しい時は表情で訴える。にこやかな表情は子どもだけでなく保育者もほっとすることがあり、子ども達はY児の笑顔を見たいために関わることがよくある。

③9月から2階の4・5歳児クラスに移行

4・5歳児にもっと関わって欲しいと考えクラスを移行した。子ども達には、事前にY児の病気のこと、歩行や会話ができるようになるために、訓練していること。自分で歩けないから車椅子で生活していること、その他の器具についての説明をしておいた。保育者がすることに興味津々で、すぐに介護の内容を覚えてしまい、Y児の登所を待ちかね、姿が見えたら迎えに行き、持ち物の始末や室内用の車椅子や靴の用意をしてくれた。Y児の世話をしたい気持ちにあふれていた。しかし、Y児の障害を伝える難しさも感じた。R男「Y君病気なんか？」保育者「そうよ」R男「なおるん？」保「治らない病気よ」R男「なおら

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

へんかったら死んでしまうんか？」保「そんなことないよ」R男が3日目に、母親に「Y君歩く練習しよんか？」と聞く。「しようよ」R男「走れるようになったら競争じような。だって悪いとこ足だけやもんな」母親は口ごもってしまった。年齢が大きいだけに大人が絶句してしまいそうな疑問を投げかけてくる。いい加減に聞き逃さずていねいに対応していかねばと思った。R男はその後何かと気にかけてくれ、散歩の時は、車椅子を押し、病気の時は一番に心配してくれた。関係が持てるというのはまず相手への関心から始まるのかもしれない。

④「Y君くさいで、パンダ組におったほうがええ」事件

毎日昼寝の前に大便のオムツ交換をするY児。T児が突然そばに来て「くさい！Y君はパンダ組におった方がええ」と騒ぐ。次の日も同じことを言う。それをみていたS児が「Y君は自分で便所いけへんのやで。そんなこといわんとって。」と怒って言う。子ども達と話し合いを持つと、他の子ども達はY児の障害について理解していて、自分で歩いて便所にいけない。換えてあげないと気持ちが悪い。かわいそう。と言う。T児を責める発言が多かった。しかし、T児は譲らず「でもやっぱりくさいから、ぼくのそばにこんとって」といった。T児は今まではY児に絵本を読んであげたり、車椅子を率先して押してくれたりしていただけにびっくりした。でも、オムツ交換の場所が保育室しかない。臭いと思うことは仕方がないかもしれないとも思った。今まで我慢できたことが急にできなくなったのかもしれない。話し合いの時は譲らなかったが、次の日からは臭いと言わなくなった。T児の思いにも理解を示しつつ、関わりを通じて変わっていくことを願った。

⑤手をつないで散歩

散歩の時、でこぼこ道になると、K児がY児に「ちょっとがたがたしてしんどいけどがまんしーなあ」と声をかける。A子はY児と手をつなぎ「歩けるようになったらAちゃんが一番に手をつないで歩きたいなー」と言う。階段は自分たちの出番とばかりに子ども達が車椅子を持ち上げる。「また階段があったら助けたる。」と頼もしい。Y児の役に立つ喜びを感じている。感謝の気持ちを伝える。

⑥大きい声出したらあかん

けんかして大きな声をだしたらY児が泣く。「大丈夫やで」「Y君がおこられとんとちがうで」となぐさめて、背中をさする、手をにぎる、笑わせる。誰かがけんかをはじめると「やめときよ。またY君がないてもええんか？」と止める。Y児をめぐってのトラブルが多いが（車椅子を押したい、手をつなぎたい、隣に座りたい）、子ども同士で解決するように促がす。Y児が困った顔をすることがないように、即けんかにはならなくなった。

⑦「今日は全然わらわへん。はよ病院いきよ。」

嘔吐し、ベッドで横になっているY児。子ども達は心配そうに額を触って「だいじょうぶ、ぬるいで」「いや、いつもとちがうで。今日は全然わらわへん」等と話している。R児が遊びにいかずY児のそばで手をつなぎ心配そうに見守ってくれた。母親が迎えにくると、子ども達は「よかったな」「病院いきよ」「はよねるんやで」等と温かい言葉をかけていた。

4. 保育の経過と他児とのかかわり（2003年度）

新5歳児は、去年の子ども達のY児への言葉かけや接し方を覚えており張り切っている。新入児がY児の椅子を触っていると「これは、Y君の大事な椅子や」と激しく怒る場面もあった。新5歳児は去年の経験からY児の気持ちをつかむのがうまい。保育者よりも子ども達と一緒にいることが多かった。保育者が必要なのは移動の介助と排泄の時位だった。仲間意識が育ちつつあることがうれしい。7月頃、クラスの子どもの写真を見せ「～ちゃんは？」と聞いていくとY児はクラスの子どもの名前をすべて指差し、驚いた。お気に入りの友達といると表情が違う。また11月には、遠足の前、動物園で何をみたいかと話をしているとY児が、「きりん」とはっきり言う。音楽会ではY児を真中にして『友達賛歌』を歌うのは子ども達のアイデアだった。

5. 考察

Y児は自分でできることは少ないし生活は受動的。しかしY児は人と一緒が好きで友達のしていることをにこにこしながらいつもみている。何かが一緒にできることが子ども同士の関係を作っていくのではない。同じ場面で笑ったり場を共有したりすることがつながりを作る。また、こそばしたり手をつないだりのスキンシップも心が通う。子ども達は「こないおもとんちがうか？」等とY児の気持ちを考えようとし、「○○いうた」等と言葉がでると共に喜ぶことができる。障害を特別のこととせず当たり前に受け入れ関わっている。子どものY児の世話をするときの生き生き感は人の役に立つ喜びにあふれている。保育者は、子ども達がお手伝いだけでなく仲間としてY児を受け入れるためには、子どもの疑問に答えY児の思いを代弁したり、Y児への対応を認めたり、注意したり、共感したりすることが重要である。それは、そばで子どもとY児の関わりを見ていないとできない。共に育つ保育とは、保育者が障害児だけでなく、他の子どもも大切にすること、どの子どもも尊重される保育に作り上げることである。加配保育士の問題はあるが、今回のように子どもの可能性は未知数であり、障害児保育をさらに深めていく必要を感じた。

NII-Electronic Library Service